（表面）

**２０２０年度 東北大学等との連携による震災復興、並びに災害科学分野における学術研究の支援経費**

**申請書**

|  |  |
| --- | --- |
| **研究題目** | 民俗芸能を通じたコミュニティの境界と交流―その記録と比較 |
| **研究代表者** | 氏名（フリガナ） | メールアドレス |
| 梅屋潔（ウメヤキヨシ） | umeya@people.kobe-u.ac.jp |
| 所属部等局名 | 職名等 |
| 国際文化学研究科 | 教授 |
| **研究****組織** | **学内** | 氏　　名 | 所属部局・職名 | 役　割　分　担 |
| 岡田浩樹土取俊輝荒木真歩 | 国際文化学研究科・教授国際文化学研究科・博士後期国際文化学研究科・博士後期 | 副代表、連携事業との折衝現地調査、資料の整理・集約現地調査、資料の整理・集約 |
| **学外** | 氏　　名 | 所属機関・部局・職名 | 役　割　分　担 |
| 川島秀一庄司幸男金菱　清川村清志 | 東北大学・災害科学国際研究所・元教授元気仙沼市教育委員会関西学院大学・教授国立歴史民俗博物館 | 民俗学、現地コーディネーター市民コーディネーター、現地調査災害社会学、関連事業との連携民俗学、現地調査 |
| **下記項目から該当する項目を選択（複数項目選択可）** |
| （１）東日本大震災や阪神・淡路大震災に関連した震災復興・災害科学に関連した研究（２）都市安全研究センターが推進する以下の研究プロジェクトに関連した研究　　　① 地震発生の場と波動伝搬の解明に向けた研究② 持続可能な減災社会インフラ構築のための地盤安全環境評価手法の確立③ 社会基盤施設の耐震設計法の合理化に関する研究④ 減災エリアマネジメントによる安全安心コミュティ構築に関する研究⑤ 新興・再興感染症への対策　～医療機関内外における耐性菌対策　　　　　　　～海外からの輸入感染症への予防及び対応～　　⑥ コミュニケーション支援と災害情報の収集・分析に関する研究 ⑦ 予測の不確実性を含んだ水災害軽減に関する基礎及び実践的研究 |
| **申請理由** |
| **目的** この事業は、東日本大震災の被害にあった宮城県気仙沼市にて、①打ち囃子と呼ばれる民俗芸能を通じてコミュニティの境界、交流そして断絶の解明　②民俗芸能の復活・記録・保存に住民と共に関与し、復興事業に共に関わり、記録し、またその記録を解釈し、見守り、必要に応じてそのエンパワーメントにも寄与しようとするものである。特に映像や五線譜を用いた記録は、現地でも求められているものでもあり、専門性もあり、再現性からも比較可能性を高めるものである。**概要** 震災で失われたコミュニティの記憶の再構築の大きな手がかりとなるものの一つが「民俗芸能」である。復興された祭礼、あるいは「民俗芸能」の奉納などは、単に復興のシンボルにとどまらず、人々のつながりをもたらし、コミュニティの単位をしるしづけ、主体的に構成されるものである。これは行政区分を眺めるだけでは見えてこない人々の実践であり、人のまとまり方の原理として注目すべきである。気仙沼市教育委員会と気仙沼みなとまつり打ちばやし大競演幹事会の協力を得て、市内に点在する「打ち囃子」のなかでも「気仙沼みなとまつり打ちばやし大競演」に焦点化して調査をおこなう。特に大競演に参加する「伝統太鼓」「創作太鼓」と呼ばれる大きく分けて2種類の打ち囃子のコミュニティに注目する。この2種類のコミュニティは成り立ちが異なるものであるが、震災後はこの境界が曖昧になっていることがこれまでの調査から捉えられつつある。このことからなぜ震災を機に民俗芸能のコミュニティの境界が曖昧化、あるいは断絶しているのか、その動きに特定の場所や世代が関わっているのか、という疑問を出発点とし、人々のコミュニティの構成原理と実際のミクロな動きを捉えていこうとするものである。 |
|  |
| （裏面） |
| **計　画　・　方　法** |
| **計画**　本研究は東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費による事業と活動に続くものである。この活動の帰趨からコミュニティが①消滅したもの、②復興前の姿にほぼ復帰したもの、③その途上、④震災前よりも活性化したもの、⑤震災前は無かったが新たに作り出されたものといった区別と、それぞれの実践を支えるコミュニティの置かれた立場を解明する。この６つの区分がよく分かるのが「伝統太鼓」と「創作太鼓」の打ち囃子が8月に一堂に会する「気仙沼みなとまつり打ちばやし大競演」であり、このコミュニティ間の相互行為に注目しながら事業を進める。「伝統太鼓」は字（集落）を単位にそこに住む人々で構成され代々伝承されているが、「創作太鼓」は近年に字とは無関係に有志で結成された「保存会」である。各「保存会」の特徴である「身体技法」を記録すると同時に、共に大競演で演じられる参加・練習方法の聞き取りと大競演幹事会で検討された資料の整理を行う。**方法**　これまでに現地調査で記録した個別の打ち囃子の身体技法の記録と囃子の採譜（五線譜への記譜）をおこなう。そして大競演当日の身体技法の記録も採譜し、各打ち囃子の身体技法の違いや、大競演での「統一」の身体技法を把握する。そのうえで通常一年を通して約10回おこなわれる合同練習時の練習方法、参加団体数などについて、（新型コロナ・ウィルスの関係もあり、メール・電話も含めての可能な媒体での）聞き取りをおこなう。また震災前後10年ほどの大競演幹事会で議事録があることがわかっている。「伝統太鼓」「創作太鼓」それぞれの団体の参加をめぐる議事録等を確認し、震災によるコミュニティのあり方の変化を検討する。 |
| **期待される効果･今後の展開** |
| **期待される効果**昨年度までは東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費やそれの関連事業によって活動しており、聞き取り資料の活字化は、現地に一定の影響を与え、地域活性化の議論を巻き起こしている。「伝統太鼓」と「創作太鼓」の境界は曖昧になってきていることが現時点で分かっており、一人の担い手が双方の打ち囃子のコミュニティに属しているケースも見られた。しかしこれまで大競演は気仙沼青年会議所が中心的な役割を担ってきたため、気仙沼市文化協会や気仙沼市教育委員会も把握が進んでいなかった。今回、採譜や収集した映像記録は、コミュニティのエンパワーメントの起爆剤として、教育委員会などに保管されることになる。そうした記録媒体から導き出されるコミュニティの再組織化、アイデンティティ形成と再編成の様態によって、復興の一つのあり方をプロファイルすることができる。**今後の展開**　今年度は新型コロナ・ウイルスの感染拡大により、日本全国の「民俗芸能」が継続または中止の選択に迫られており、打ち囃子もその一つである。この選択のプロセスも記録することでコミュニティが抱える構造的な特徴や問題がより浮かび上がってくる可能性があり、民俗芸能のコミュニティの新たな研究課題への展開が考えられる。また同じ事業者（梅屋）による、南アフリカ・ケープタウン大学との国際交流計画（JSPS-NRF二国間交流事業：「自然災害人的災害に対するレジリエンスの研究」）において、気仙沼が昨年度の拠点になっており、連携することでより大きな成果をあげることが期待できる（昨年度も、別事業者の類似事業との連携実績がある）。 |
| **経　費　使　用　内　訳** |
| 費　目 | 品　名 | 仕　様 | 単価（円） | 数量 | 金　額（円） |
| 旅費・謝金 | 旅費（神戸⇔宮城）謝金現地コーディネート経費 | 3泊4日1日8時間1日8時間 | 80,0006,0008,000 | 455 | **計** | **390,000円** |
| 消耗品費 |  |  |  |  | **計** | **円** |
| その他(会議費・諸経費等) | 録音書き起し・太鼓の採譜 |  | 10,000 | 1 | **計** | **10,000円** |
| **合　　計** | **400,000円** |
| **他の外部資金の獲得状況の有無（現在申請中も含む）** | **有** |  | **無** |  |
| ※「有」の場合，下記項目を記入してください |
| 募集機関名：　　　　　　　　研究題目： | 申請中 |  | 採択済 |  |